

砺波市美術館 新館長挨拶



『ドーナツのように』

砺波市美術館長 小野田裕司

四月に美術館長となり、三ヶ月がたちました。よちよち歩いております。7月に入り、毎日のように幼稚園、保育所の年長から小学校の一、二年生が「子どもの造形アトリエ」のために美術館に通ってきます。ダンボールで迷路を作ったり、瓦屋さんが使う粘土で動物やお家を作ったりしてはしゃいでいます。粘土で靴や手袋を作る園児もいて豊かな発想に驚きます。市内の小学校が合同で来たグループの時には、自己紹介もありました。「私の好きなものはご飯です」という子や、「私の好きなものは踏み切りです」という面白い子もいました。このときの活動はボール紙を切って自分の分身を作るものでした。持ってきたTシャツや靴下を履かせて、もう一人の自分を完成させていました。

定年になって自分も少し創作活動をと、誘われるままに俳句をはじめました。二ヶ月に一回、出町ふれあいセンターの蓑毛句会に参加しています。60代はまだ若手です。先月高山の知り合いの陶芸店に行ったとき、「円空もかぶりついたか柏餅」と句が浮かび、新聞に投稿してみました。円空は江戸前期の行脚僧で飛騨地方には木彫りの円空仏が多く残されています。選者は「円空もかぶりつきしか柏餅」と文語調に添削し入選となり、1,500円の図書券が送られてきました。

食いしん坊である私は、食べ物詠んだ句が目にとまります。

パンにバタたっぷりつけて春惜しむ	久保田万太郎
腸に春滴るや粥の味	夏目漱石
街に雨鶯餅がもう出たか	富安風生

昨年亡くなった歌人 河野裕子さんの本に、「本当に言いたいことは言わずに、歌はドーナツのように作ったらよろしい。真ん中の言いたいことは抜いて、六分目、七分目くらいに作っておくと、おのずから泉が湧くようにして器が満たされるのです」とありました。それを読んで彫刻家の舟越桂の言葉を思い出しました。「(作品のタイトルに) 選ばれる言葉は作品に含まれていて描かれていないこと。」舟越桂の作品は「冬にふれる」「凍ったはしご」「肩に残る声」「支えられた記憶」などのタイトルが付いています。日本画などでは余白が大切にされていますが、いつかはドーナツのような平明で余韻のある句が作れるようになりたいと思っています。